

若者が住みたくなるマチを目指して

一緒に未来築き上げる



大沼 瑞穂氏

Uターンしたいが医療体制が不安で戻るのをためらう世代などに対し、アピールできる体制の充実が求められる。



唐沢 剛氏

東京は国際都市を目指し、地方は独自性のある産業、文化を生かし、互いに共存共栄していく必要がある。



加藤 まちづくりを視点にして考えると、課題がいろいろ見えてくる。課題を自分たちで解決しようと思っているような若い人を引きつける、懐の大きい地域にしていきたい。課題を解決する取り組みには、多くのケースでビジネスチャンスが潜んでいる。どうにもならないときは公共の力が必要だが、ビジネスで解決できるところに手を伸ばしてしまつと、若い人たちのチャンスや活躍の場を奪ってしまうことになる。この見極めをしっかりとしたい。若い人が何かに取り組もうとする、過去の常識から外れることもあるだろう。そうした場合も、新たな形を模索している、と受け止められる地域づくりが重要。そうした環境が

舟山 若者の価値観が多様化する中、心のゆとりなど別の豊かさを求める人もいる。こうした地方回帰を考える人をしっかりと取り込んでいけるかが問われている。大江町では住宅支援などハード面だけでなく、ソフト面の応援として地域ぐるみで転入者をサポートする取り組みを行っている。全国には離島や漁村に移り住む成功例もあり、居場所や出番があり、創業支援などあと一歩の後押しがあれば若者の心にはまる。特に第1次産業は創意工夫の余地があり、給料は下がってもこうした価値観を求める若者はいるはずだ。地元の人がまちの魅力に気付き発信することで、

若者が自然と集まるような地域づくりに向け、知恵を出し合っていくべきだ。

大沼 インバウンドを進める上で活動母体をつくり、継続的にやっていくことの必要性が示されている。東京五輪・パラリンピックのホストタウン登録による縁を、どうつなげていくかも大事になる。

唐沢 医療体制の充実が、地方創生で重要な視点だ。山形で安心して暮らしていくことの基盤になるからだ。医療へのアクセス権は保障されるべき、大切な権利だ。Uターンしたいが医療体制が不安で戻るのをためらう世代などに対し、アピールできる体制の充実が求められる。地方創生において地方大学に対する期待も大き

兼子 山形には可能性のある中小企業がたくさんある。その企業の未来を一緒に築き上げようと(若者に)発信することが重要だ。企業が、若者を求めていると力強く発信してもらえれば、われわれも自信を持って地元への回帰を促すことができる。そして、本当に人材を求めているのであれば、首都圏でも就職試験を行ってほしい。神奈川大は他の大学と合同の企業説明会を開くなど、情報提供の場をつくらせている。地方のために積極的に協力していくので、大学をぜひ利用してほしい。古里で誇りに思えることをしっかりと確認しながら、若者と共に山形をつくっていくというところをアピールしてほしい。



兼子 良夫氏

若者を求めていると力強く発信してもらえれば、われわれも自信を持って地元への回帰を促すことができる。

し繁栄してきた。東京は国際都市を目指し、地方は独自性のある産業、文化を生かし、互いに共存共栄していく必要がある。若者定着には、(子育て世代の)30代女性にとって魅力ある環境を整えるという視点が大切になる。やりがいがあり働きやすい職場に加え、彼女たちを温かく受け入れる地元も欠かせない。21世紀は「こちゃませ」と開放をコンセプトに付加価値を高めていく時代。金沢市に高齢者住宅や障がい施設、温泉などが同じ敷地にあり、多世代が暮らす生活テーマパークがある。こうした「こちゃませ」と、誰でも受け入れる「開放」が新たな魅力を創出する。

山形市内で今年6月に開かれた、高校生が県内企業で職場体験する「ジュニア・インターシップ」の面接会。人口減少が深刻化し、若者の地元定着が課題になっている。

閉会のあいさつ

山形放送社長 本間和夫

未来に向かって持てる力を最大限に生かし、魅力ある山形県をつくり上げていくための方法、考え方といった点で貴重な提言をいただいた。都市部ではなし得ないまちづくりに挑戦する、山形で幸せに暮らしている姿を見せる、住む場所は本当に東京でいいのかを問い掛けるといった手法も有用と感じた。若者が住みたくなるまちづくりのヒントは、私たちの日常の中にあるに違いない。

